「敬語表現」の意味するもの

坂　本　　恵

（キーワード　敬語・敬語表現・待遇表現・配慮・尊重）

0　はじめに

日本語の「敬語」の働き、意味合いなどについて考えるとき、狭義敬語だけを考えていたのでは捉えられないことが多い。敬語を含む表現、含まない表現どちらも視野に入れ、つまり、使うか使わないかも考えた上で「待遇表現」全体を見渡さなければわからないと言える。その上で、何をどう言うか、話題の選択などについても考慮に入れた上で、文話を単位として考えなければならない。広義には言い方、服装なども含む非言語にも広げて考えなければならない。広く人や場に配慮したすべてをここでは「敬語表現」と呼び、「敬語表現」はいったい何を表す、何を意味するものであるのか、そして相手や場に対する配慮は具体的にどのような形で表されるかを考えてみたい。[1)]

1　基本的な働き

最初に日本語の中に存在する配慮を表すためのシステムについて考える。

1．1　上下関係

「敬語」と聞いてすぐ思い浮かぶのは「上下関係」である。「敬語」のシステムは通時的には、身分上の上下関係を表すために発達したもので、「読む」、「読み給ふ」と「読ませ給ふ」の違いのように段階的な、かつ微妙な上下の差を表すことができるようになっている。江戸時代においても、二人称で区別されるいくつかの段階が設定でき、ほとんどの人はその中に固定的に位置を占め、言葉遣いによって身分関係が分かるようになっていた。[2)] このシステムはそれぞれに属する語を変えながら、長い間続いてきたものである。現代語では上下を表す体系としては、それ以前と比べると若干簡素化され、上下差の微妙な違いまでは表しにくくなっているが、依然として存

在している。

上下関係を表すために使われるのは主に狭義敬語である。話題の人物の表し方として、「社長はいらっしゃいます」に対し、「平社員は行きます」と表すことで社長と平社員の差をつけることができる。また、話をする二人の間で同じレベルでなく、異なったレベルを用いた場合、二人の間に上下の差をつけることができる。相手が行ったかどうかを問う場合に現代語ではほぼ4つのレベルを想定できる。「(あなた様は)お出でになりましたか」「(あなた様は)いらっしゃいましたか」「(あなたは)行きましたか」「(おまえは)行ったか」などであり、これをそれぞれ、プラス2レベル、プラス1レベル、ゼロレベル、マイナス1レベルとレベル分けすることができる。[3] 一方から他方へはプラス1レベル、反対方向にはマイナス1レベルを使うことにより、その2者の間に上下の差をつけることができる。社長と平社員が話すときにはそのような上下差をつけて話すことが期待されているということである。また、相手によってプラス2レベル、プラス1レベルと上下差に応じた言葉遣いができるようになっている。

伝統的に狭義敬語はこのような上下差を表すものとして発達してきたわけで、現代語においても特に直接尊重語、間接尊重語、場合によっては相手尊重語などがその働きをになったものといえる。

1．2　恩恵関係

現代日本語の配慮のシステムを考える場合、恩恵関係の表示は重要な要素の一つである。相手から恩恵を受けていると表すことは相手をあげることにつながり、相手に対する配慮を示すことになる。相手から実際に恩恵を受けた場合にはその表示が非常に重要になるし、特に恩恵を受けていないという場合にも相手の行為を自分側に対する恩恵と捉えることが相手に対する配慮となるのである。中立的な事実を表す「受ける」「与える」の他に、それを恩恵関係として捉えた「あげる」「くれる」「もらう」さらにそれを敬語形にしたものが存在することはある意味では日本語の特徴の一つとも言える。

恩恵の表し方には大きく分けて三つある。まず、この「あげる」「くれる」などの動詞、補助動詞を使うことで示すものである。たとえば、日本語では「(あなたがわたしのために)買った」と言いたい時には、普通、「買ってくれた」となるはずである。相手の行動を自分に対する恩恵と感じること、

そしてそれを表すことが相手に対する配慮となる。「あげる」「くれる」「もらう」にそれぞれの敬語系を加えた表現は、ある行動を恩恵として捉えたことを示すものである。ここで重要なのは、恩恵の方向として、恩恵は相手側が与え、自分側がそれを受けるということを表すことが相手に対する配慮となるということである。逆に自分が与え、相手が受ける恩恵はそれを表さないことが配慮となるのである。したがって、「持ってあげる」などと自分が与える恩恵を表明することは恩着せがましいことと嫌われるわけで、特に上位者に対しては使ってはいけないものとなっている。自分側に与えられる恩恵は積極的に表すことが重要で、実際にはそれが恩恵ではない場合でも恩恵があるかのようにあらわすことが相手に対する配慮となるのである。この配慮は方向として相手、話題の人物いずれも考えられる。

以下の二つの表し方は主に相手に対するものである。直接このやりもらい系の動詞を使わなくても、「利益」「決定権」が重要な要素となる「行動展開表現」の場合、「利益」の表し方によって相手への配慮を示すことができる。相手を誘う場合にも、「いらっしゃいませんか」と相手にも利益のあるような誘いではなく、自分に利益のあることを示す「来ていただけませんか」というような表現にするというような場合である。[4]

また、言葉で、「いつもお世話になっています」などのように相手からの恩恵に対し感謝の意を表すことも、簡単で単純ではあるが、相手からの利益を表明する重要な表現である。実際に恩恵を受けているかどうかに関わらず、相手との関係をすべて相手からの恩恵と捉え、それを表明することが配慮につながるのである。「先日はどうも」などのように以前の行動について言及することがそれを恩恵として捉えていることを示し、配慮につながるのである。

1．3　決定権の存在

決定権が問題になるのは、行動展開表現の場合、そして、その配慮の対象は相手ということになる。自分側に決定権がある場合はそれを見えないように表し、さらに積極的に決定権を相手に移行させることで配慮を示すこともできる。具体的には、「してもいいですよ」という代わりに「どうぞ」、さらに積極的に、「お願いします」などと表すことであり、「してください」と指示する代わりに、「していただけますか」さらには、「してもらってもいいですか」のように表すことである。

1．4　文脈を作る

表現行為を考える場合、ある一文だけを取り出して考えてもわからないことが多い。相手に配慮を表すシステムにしても、文話全体を考え、その中でどのように配慮を表すかということで考えなければならない。スピーチなどでも、最初の挨拶、前置き、最後のまとめ、挨拶などの枠組みとも言える部分の中で相手や場に対する配慮が表される。枠組みの中で特に丁重語がよく使われることはその一つの現われである。この枠組み全体を考えることが配慮となる。

行動展開表現の場合も、たとえば、依頼の場合、「してください」と一文で言っても丁寧にはならない。切り出し、依頼の予告、事情説明などで段階を踏んで依頼することが配慮となる。相手の準備を促し、徐々にわからせていくという方略をとることが配慮となる。

1．5　相手を神聖視する存在として扱う

日本語の場合、相手の希望、意向などを問うことは配慮とはならない。希望、意向を述べるのはあくまでも依頼などをするいわば、下の立場の側である。こちらの事情、希望を述べ、それをどのようにするかは相手に任せる、そのような扱いをすることが配慮となる。いわば、相手を全知全能の存在、神聖視する存在として扱い、下の立場からは一方的にお願いする、といった体裁をとるわけである。依頼するような場合も、直接の依頼の言葉を発するより、それに至る事情説明で相手にわかってもらう、という形を取った方が丁寧になるということである。また、敬語回避、などと言われることもあるが、「お名前は」だけで「何とおっしゃるんですか」などの述部を省略する、甚だしくは、「失礼ですが」だけで名前を問うなども、相手に預けることによって丁寧さを出したいという一つの方略と言える。

相手を神聖視するわけであるから、相手がどのようであるかなどは聞いてはならないことになる。相手の意向を問う場合にも、「飲みたいですか」などと直接に相手の好みを聞くことは、親しくない関係で相手の意思、感情を聞いてはいけないとも考えられるし、また、同時に相手がどうであるかより、「ありますが、いかがですか」と自分側にその用意があることを知らせることが配慮になるという考え方でもあると言える。「よろしくお願いします」などは英語では押しつけがましいと嫌われるということであるが、日本語では弱者である自分を示し、強者である相手にひたすら配慮

をお願いすることを示すため、好んで用いられるわけである。

2　配慮をどのように表すか

以上に述べたことは主に言語の中にある配慮を表すためのシステムである。次に現代日本語ではこのシステムを使って、どのように配慮を表しているかを考えたい。

2．1　上下関係を表すことによる配慮

もっとも基本的には、上下関係を表すことのできるシステムを使って上下関係を表すことにより配慮を表すことが考えられる。この場合、下位に待遇することは直接に相手を配慮したことにならないと考えられるので、主に、上位にある相手あるいは話題の人物を上位の存在として表すことを中心に考える。上位にある相手に対し、プラス2レベル、プラス1レベルで待遇することにより、相手を上位にあると表すことができる。

それでは、次の問題として、誰を上位にあると認定するのか、つまり、上下関係の基準は何かということがある。

昭和３０年頃を境にして、日本語の敬語のシステムは大きな変化を遂げた。現在、敬語などを使って表されるものは広く人や場に対する配慮と言え、その表し方は上下関係を表すにとどまらない。現在、身分上の上下関係はほとんどなくなり、現在残る上下関係は年齢上、立場・役割上のものなどに限定されると言ってもよいだろう。

年齢差がある場合は上下差を考えることができる。年配の人と若い人が話す場合、年配の人から若い人に対してはマイナス１レベルで、若い人から年配の人に対してはプラス１レベルで話す、などのような場合である。この場合、何歳くらいの年齢差がある場合にレベルが変わるかという認識は個人差が大きく、はっきり決めることはできないが、年齢差を厳しく判断する場合には１歳の違いでも言葉遣いが変わると言うことになる。一般的には２、３才あるいは５才らくらいの違いがある場合に変わると言えるだろうか。また、多少の年齢差があっても言葉遣いを変える必要を認めないと言う考え方もある。

立場、役割上の上下関係というのは、会社などの系列上の上下、教師と学生のように指導する側とされる側、店員と客のような立場の違いなどで表されるものである。同一組織内での年功序列のように、経験の差と考え

られるものもある。たとえば、学校・会社内などでの先輩後輩関係は純粋な年齢から来る上下差より、学年、入社年次などが優先されるのはその現われであろう。年齢とこの立場・役割上の上下関係がねじれた場合が対応の難しいところとなるわけである。

昨今よく言われる「タメ口」というのは、この上下関係を無視したときに言われるものであろう。年齢上あるいは立場上の上位者に対して、対等な言葉遣いで、具体的にはマイナス1レベルで対応することを表したものである。この禁忌を破ることへの抵抗から「タメ口」という言葉は生まれたもので、このルールの無意識の存在の大きさがうかがわれる。

2．2　双方向の上位関係

狭義敬語を対話の場合にレベル差を用いれば上下の関係が表されるが、双方向に用いることによって双方向での配慮が表せる場合もある。上下差が特に設定できない場合、つまり、同じくらいの年齢であるとか、年齢差があっても同じ立場である、あるいは、お互いに組織を背負っているような場合で双方に配慮すべき事情があるような場合には、双方向にプラス1レベルで待遇することにより、配慮を表すこともできる。初対面の同年代の2人がいる場合、まったくお互いに対する情報を持っていない状態で言葉を交わすことはめったにない。通常は何かの立場を背負っているとか、たとえば、同じ大学の学生であるとか、あるパーティ会場でであったのならばそのパーティーに参加した者同士、同じ学会に所属している者であるなどの何らかの情報を持っているはずである。初対面の場合はたいていは何らかの立場を持って、いわば社会的な存在として対話するのであり、その場合の通常のレベル設定はゼロレベルと言うことになる。何らかの条件があって、初対面であっても特に相手に対して配慮しなければならないような場合には、お互いにプラス1レベルで対応するということもあるだろう。少なくとも社会的な存在として対応する場合、マイナス1レベルということはありえない。もちろん、初対面であっても、先にあげたような、教師と学生、会社などでの上司と部下の関係、店員と客といった上下関係が設定できる場合にはそれが反映されるわけである。立場的に上下関係が設定できない場合に双方向への配慮としての双方プラス1レベルでの対応が考えられるのである。

一般的に初対面でない場合も、双方向での配慮を示すものとして、双方

向でのプラス1待遇がある。特にこれは、上位者に対する適切な二人称がない現代日本語においては、「(あなたは)いらっしゃいますか」「(私は) 参ります」という形で人称の代わりをするものとも言える。実際、敬語を人称と捉えた考え方もある。[5)]

2．3　立場を示す

日本語の敬語を語るとき、「ウチ」「ソト」意識について触れられることが多い。「敬語」の一つの働きとして、ウチかソトかの立場を明らかにするために使われるという面がある。たとえば、「社長はおりません」と言うとき、「社長」はその話し手の側の人間であり、相手はその外にいる人間であることを示している。先の人称の考え方にも近いものであるが、より明確に自分と相手と、話題の人物の立場を示すことができるものだと考えることができる。[Aさんはいらっしゃいますか」と言うか、「Aはおりますか」ということで、自分と相手とAさんの関係を示すことができるということである。これは、恩恵を表す授受表現でも表すことができ、「AさんがBさんを手伝ってくれた」「AさんがBさんを手伝ってあげた」ということで、自分がAさん側にいるのか、Bさん側にいるのかを表すことができる。これは特に話題の人物の扱いで明らかになるもので、自分と相手だけの関係では特にウチかソトか問題にならない。

2．4　社会的役割の尊重

どんな人に何が言え、何が言えないか、何が頼め、何が頼めないかといった人と立場の問題は配慮を考える上でも重大な問題である。社会的な関係であれば、たとえば、仕事上の上司、部下の関係、教師と学生の関係、先輩後輩の関係などの中で、どんな事を言ってもいいか、どんなことを依頼することができるかは大体決まっているといってもよい。たとえば、学生から教師に向かって学習上の疑問は聞くことができるが、教師の個人的な状況を聞くとか、服装持ち物などをほめるといったことは普通はできないことである。同様に、推薦状を書くことは依頼することができるが、借金の申し込みをしたり、観光案内を頼むなどのことはできない。もちろんここでできない、と言ったことでも状況によっては可能なこともある。しかし、原則としてできない、依頼することは失礼にあたるという認識を持った上で、どのような条件、状況のもとでなら可能か、ということを探ると

いう順序になるであろう。このような、教師と学生という社会的役割の中でできること、可能なことは大体決まっていると考えてよい。これは、友人関係、親戚関係などの場合でも、できること、可能なことは大体決まっていると考えられる。

このような相手との社会的な役割を認識し、それにふさわしい行動をすることが相手に対する配慮となる。たとえば、教師の授業や服装などをほめたいときには、それが場合によっては失礼になるということを認識した上で言い方や状況を工夫するということになる。「今日の授業で前から疑問に思っていたことがわかりました」や、授業が終わって雑談をしているときに、「先生はいつも素敵だって皆で言ってるんですよ」などと言うなどの工夫が必要となるということである。[6]

3　その他の配慮

3．1　上から下への配慮

上下関係がある場合の配慮としては、下から上に対しては、上位の立場を認め、それを表すことが最大の配慮である。しかし、上から下に対してはこの形では配慮したことにはならない。別の工夫が必要となる。

上から下に対しては、相手が下位者であってもそれをはっきり言葉では表さないようにすることが配慮となる。「(おまえ)は行ったか」とマイナス1レベルで待遇する代わりに「行きましたか」とゼロレベルで待遇するという方法である。「やっとけよ」ではなく、「やってください」と言うといった配慮である。また、相手を個人の人間として認め、「がんばってるね」などのようにねぎらったり、積極的に相手の服装などをほめることで配慮を表すこともできる。これらが上から下に対する配慮である。

3．2　「謙譲」の精神

相手に対する積極的な配慮と同時に、日本語では、自分の位置を低く表明することも相手に対する配慮となる。間接尊重語、丁重語はまさにその精神に基づいたもので、そのため、旧来の分類では「謙譲語」とされているわけである。また、尊卑語、特に自己卑下語は自分を低く表す精神を直接に表したものである。上下関係の表し方もこれに基づいているが、その他に、自分を否定的に表すことも配慮の一方法である。自分からのプレゼン

トを「つまらないもの」と言ったり、ほめられてそれを否定したり、意見を述べるときには「僭越ですが」などと前置きをするなどで表すことができる。これは自分の立場をわきまえるということにつながり、相手を立てる、思いやるという見方ができるが、一方、特に立場の弱い、下位者にとってはそのために精神的に卑屈になったり、意見も言えないようになってしまうという面もある。

3．3　きれいにする

一般的に言葉遣いをきれいにすることも相手に対する配慮となる。これは相手に対する配慮であると同時に、自分自身への配慮ともなる。狭義敬語の中では主に美化語がこの役割をになっている。

3．4　社会的関係から個人的関係へ

双方マイナス1レベルという関係は、家庭内や(同年輩の)親しい友人同士ということになる。つまり、個人的な関係ということになる。それ以外の場合はすべて何らかの意味で社会的な関係であるといえる。初対面では相手のことをほとんど知らない、完全な社会的な関係であるが、時を経るにしたがって、徐々に親しい、個人的な関係になっていくわけである。もちろん、まったく個人的には親しくならない関係もあるが、たいていの場合、社会的な関係と個人的な関係が混ざり合っていくものであろう。その中で、自分と相手との距離を測り、関係を作っていくものである。双方プラス1レベルの関係から、双方ゼロレベル、双方マイナス1レベルと変化していくものであろう。それに伴って、相手の個人的なことを知り、社会的な関係ではできない感情伝えができるようになっていくのである。つまり、ほめ、不満を伝える(愚痴)、慰めなどである。

先に述べた「タメ口」といわれるものは、上下差がある場合の上位に対してマイナス1待遇をする、あるいは双方的にプラス1以上の待遇をするべき社会的関係のある場合でも、双方でマイナス1待遇をするといった場合をさす言葉であるが、これも、社会的関係であるものが、親しい、個人的な関係に変わったことを示すものであるといえる。したがって、「タメ口」の関係と言えるのは、個人的に親しい関係になっていることを表すものである。

3．5　内容か枠組みか

相手に配慮するということは、相手に対し上位に扱う、恩恵や立場で示す、ということだけを表すものではない。「タメ口」で表されるように、上位待遇をすることより、個人的な親しい関係になることを喜ぶ場合もある。逆に常に親しい関係にあることが求められているということはなく、相手の立場を尊重することが求められることもある。相手が自分に対しどのような待遇をしてほしいと思っているかを考え、それに従うのが相手に対する配慮と言うことになるだろう。

その意味では、相手に対し丁寧に接することだけが配慮とはならない場合もある。学問上の論争をしている場合に相手に配慮するあまり反論しないということはほとんどないと言ってよい。この場合は言葉上での配慮より、実質的な議論をすることが相手に対する真の意味での配慮となるわけである。お互いに向上するためには、あるいは真に相手のことを思えばこそ、相手に対し厳しいことを言うこともある。それもある意味では相手に対する配慮の一種である。教師が卒業生から手紙をもらった場合、お手本通りの、最大限に丁寧な手紙より、学生が自分の言葉で自分の状況などについて書いたものをうれしく思うだろう。場合によっては相手に対する配慮は、言葉上の配慮より、伝える内容を充実させることでより表されることがあるのである。要は、相手が一番望むことをする、相手に一番必要であると思えることをすることが相手への配慮となるのである。それが相手を最大限尊重したことになるわけである。

4　おわりに

ここまでは相手への配慮について考えてきたが、その他に、「場」に対する配慮もある。式典、会議といった「場」のレベルが高い場合には、改まった言葉遣いであることが求められる。「場」がプラス1以上になると、相手がどんな人であれ、個人的な情報は消え、「場」への配慮が優先することになる。ここで主に用いられる狭義敬語は丁重語である。

日本語の「敬語表現」はいわばすべての表現の枠組みを作っているものであると言える。その上で、「敬語表現」は真に配慮を表すシステムだと考えれば、相手、場、その時の場面に応じて適切な選択をし、ふさわしい表現を考える、それこそが相手を尊重することになるという考え方がその精神であると言えるだろう。

注

1）「敬語表現」については『敬語表現』（蒲谷宏・川口義一・坂本惠1998大修館書店）で詳しく述べた。本稿では前著で十分に触れられなかったことについてまとめた。本稿での考え方については、「『敬語』を乗り越える」（蒲谷宏1999『言語』28－11）と重複することも多い。

2）小島俊夫1974『後期江戸言葉の敬語体系』笠間書院。

3）レベル、狭義敬語の分類、用語などについては『敬語表現』による。

4）坂本・川口・蒲谷1994「「行動展開表現」について－待遇表現教育のための基礎的考察－」、『敬語表現』参照。

5）石坂正蔵1969『敬語』など。

6）「ほめ」については川口・蒲谷・坂本1996「待遇表現としてのほめ」『日本語学』（明治書院）5月号。